HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初任セラピストの自己開示と職業的発達 ： 臨床場面における主観的体験の質的研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	草岡, 章大
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第15333号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89501
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	KUSAOKA_Akihiro_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：草岡　章大

学位論文題名

初任セラピストの自己開示と職業的発達
－臨床場面における主観的体験の質的研究－

本論文は，初任セラピストの臨床場面における自己開示の主観的体験と職業的発達の関係を探索的に検討したものである。本論文は，「はじめに」，第1章（セラピストの自己開示の文献レビュー），第2章（セラピストの職業的発達の文献レビュー），第3章（研究の目的及び方法），第4章（研究Ⅰ），第5章（研究Ⅱ），第6章（研究Ⅰ及び研究Ⅱのまとめ），第7章（総合考察）から構成される。各章の内容は以下の通りである。

第1章では，セラピストの自己開示研究のレビューを行った。自己開示はセラピスト自身をセラピーの場に表現することであり，大多数のセラピストがキャリア早期に直面する問題である。ところが，臨床心理学の歴史的展開の中で形成された自己開示をタブー視する価値観が教育訓練機会の欠如を招き，多くのセラピストにとって自己開示は困難体験化した。一方，初任期から中程度の臨床経験の増加に伴って自己開示頻度が高まる傾向が見られるが，初任期のセラピストを対象とし，臨床場面での文脈も勘案した自己開示を扱った研究はほとんどなく，初任セラピストが自己開示に至る過程には不明点が多いという課題を示した。

第2章では，セラピストの職業的発達モデルを概観し，初任セラピストの特徴を抽出した。セラピストのキャリアは複数の段階に分かれ，各段階の発達課題への取組みを通じて，職業的自己と個人的自己の二側面が統合されていく過程を詳述した。初任期間では，セラピストの職業的側面に教育訓練との距離の変化，自立・自律などの変化が生じ，その中で，自分の個人的側面が自分の仕事に表現できることに気づくようになるとされており，職業的側面の変化と自己開示の関連が示唆された。

第3章では，本論文の目的と方法について検討した。自己開示は多くのセラピストが直面する課題であるにも関わらず，臨床場面における自己開示を巡る初任セラピストの主観的体験を扱った研究は殆ど行われておらず，職業的側面との関連も扱われていない。この点から，本論文では，臨床場面での初任セラピストの自己開示に関する主観的体験の特徴を明らかにし，初任セラピストの職業的発達との関係を探索的に検討することを主たる目的とした。そして，本論文全体のデザインと質的研究法による研究方法を示した。

第4章では，研究Ⅰとして，クライエントから質問された際の受身的自己開示にまつわる初任セラピストの主観的体験と職業的発達に及ぼす影響とその過程を検討した。初任セラピストは，クライエントからの質問に対する教育訓練に沿った対応に違和感や不自然さなどを抱き，セラピストらしい対応と本来自分が望む対応との間で葛藤を体験する。この違和感や不自然さ，葛藤を出発点として，今の自分にできることを探索し，タブーであった自己開示へと至る。この自己開示への挑戦を通じて自らの「自分らしさ」に触れ，自分に合ったスタイル，「自分らしいセラピスト」像の探索へと向かうという職業的発達過程について論じた。

第5章では，研究Ⅱとして，初任セラピストからの自発的自己開示にまつわる初任セラピストの主観的体験が職業的発達に及ぼす影響とその過程を検討した。クライエントが示す困難や課題によって初任セラピストの個人的側面が刺激されて援助意欲が活性化し，その援助意欲をクライエントに伝える方法として自己開示が選択されていた。この際，自己開示をタブーとする「セラピストらしさ」と，個人的側面に由来する援助意欲とが内的対立を起こすが，援助意欲が後押しとなって「セラピストらしさ」を越えて自己開示へと至っていた。この体験から，初任セラピストは自身の職業的側面と個人的側面が不可分であることへの気づきと，「自分中心の自己開示」から「自由であることを学ぶ」へと向かう職業的発達過程について論じた。

第6章では，研究Ⅰ及び研究Ⅱの共通点と相違点を検討した。両研究には，自己開示へのためらいの背景にある「セラピストらしさ」を求める初任セラピスト特有の傾向，自己開示へと至った要因としての援助意欲，自己開示体験と振り返りが「セラピストらしさ」の希求から「自分らしいセラピスト」の探索へと職業的側面の変化をうながす，という共通点が見られた。相違点として，職業的発達過程では，受身的自己開示では実践的学びを通じて習得した教育訓練内容の修正が強調される一方，自発的自己開示では，主体性や自律性の発展が中心になるという違いが認められ，これらと初任セラピストの特徴や発達課

題との関連を論じた。

第7章では，研究Ⅰ及び研究Ⅱの結果を踏まえて総合考察を行った。援助意欲は，個人に元来内在する個人的援助意欲，教育訓練や臨床実践により形成される職業的援助意欲，クライエントに刺激されて両者が混ざり合う混合的援助意欲という三つの状態に分けられること，自己開示への動機は主に個人的援助意欲に根ざすこと，自己開示へのためらいは初任セラピストに見られる「セラピストらしさ」を追い求める姿勢と個人的援助意欲の内的対立から生じること，自己開示体験の振り返りは職業的発達促進の好機であり，特にセラピストとしての姿勢や態度に重要な「自分らしさ」の発展に影響を与えることを論じ，初任セラピスト自身による自己省察の要諦を示した。従来，「自分らしさ」の探索と形成は数年の臨床経験の蓄積後に進行すると位置づけられてきたが，自己開示をきっかけとした「自分らしさ」の探索と形成の作業は臨床実践についた直後から始まっている可能性と，「自分らしさ」の探索と形成は職業的自己の確立に自然に随伴する過程ではなく，初任セラピスト自身の自己省察という能動的作業によって促進される可能性の二点が，従来の職業的発達モデルの再考すべき点として示唆された。

本論文により，以下の成果が得られた。一点目に，初任セラピストの職業的自己と個人的自己の間で生じる内的葛藤が自己開示の困難さの一因であることを示した。二点目に，セラピストの援助意欲には，個人的援助意欲，職業的援助意欲，混合的援助意欲の3つの状態があり，そのバランスが個人的援助意欲に傾いた状態下で自己開示が生じることを示した。三点目に，初任期の自己開示は，職業的発達の促進要因である「自分らしさ」の探索の端緒になることを示し，これを踏まえて初任セラピスト自身による自己開示場面の振り返りの要諦として3つの問いを示した。四点目に，従来の職業的発達モデルにおける「自分らしさ」の位置づけに関して二つの再考すべき点を論じた。

本論文の課題として，我が国と欧米圏の心理職の教育制度や資格制度の差による職業的発達の単純比較の難しさ，我が国と欧米圏における「自己」概念の差異が自己開示や「自分らしさ」に及ぼす影響，本論文の研究協力者の属性の偏りによる結果の適用範囲の限定，質的研究法の限界と転用可能性の範囲，他の職業的発達段階との関連が挙げられた。